

編集後記

二〇二四年度は南島研究グループにとって困難が多い年となりましたが、十一月には予定通り山里純一先生・大平聡先生をお招きしての講演会を無事開催することができ、感謝に堪えません。

来年度は研究に本腰を…と思いますが、それにしましても世界を見回すと、ウクライナやガザでの戦禍、米国における新政権など、心を騒がせる材料に事欠きません。沖繩についても、先島諸島の要塞化への懸念、気候変動による海洋の変化など重苦しいニュースが聞こえて来ます。

このような中で島袋盛敏・翁長俊郎著『標音評釈 琉歌全集』（武蔵野書院）を開きますと、今まで何気なく読み飛ばしていた古の琉球の言葉が、にわか心に迫って来るように感じられます。

「開静鐘や鳴てもおぞむ人やをらぬ一期この世界や闇がやゆら」

尚瀬王（一七八七年～一八三四年）が詠んだ歌とされています。「明け方の鐘が鳴ったのに、人が起きて来る様子がない。この世はいつまで闇に包まれているのだろう」との意味です。激動の時代を予感しながら独りたたずむ王の不安が伝わってきますが、これは私たちの思いかも知れません。

「橋橋のきよらさ世の中の盛りあまたお真人もよらてきよら

さ」

琉球では十七～十八世紀、特に尚貞王・尚敬王の時代に多くの美しい石橋が建てられました。真玉橋や比謝橋などが知られています。各地方にかけられた橋が美しく、世が繁栄して人々がその上を往来している様子がうろわしい」と無名の詩人は歌います。単純な内容ですが、地と地、人と人を結ぶ橋は平和のイメージでもあることを考えると、人の間の溝に橋をかける営みの大切さを思い起こさせます。

こうした中、那覇空港の沖合で元気に子育てをするザトウクジラの映像が、最近ネットで話題になりました。昨春のジュゴン生息確認に次ぐ明るい海の話題に、心がやわらぎますね。自然に生きる生命の群れの躍動を実感できました。

「静かなるみ代や月も海原の波の上にうつる影のきよらさ」
小禄朝恒（一七九〇年～一八三五年）の作とされています。

「静かなるみ代」とは「平穏な時代」。そのような時代にあつて、海原の波間に照り映える月影が美しいとの意です。波間に泳ぐジュゴンやクジラの姿も、平和な海があつてこそ。

琉歌は、人々の願いと希望をこめた祈りの詩でもあります。これらの言葉を、私たち自身の祈りにしたいです。

（文・栗原 健）